

いじめ

岬町立岬中学校 二年 松本 美花

私は本屋さんで本を探しているときにこの本の題名を見て、すてきだと思ったので手にとって見ました。ページをパラパラめくるといじめについての本でした。私は中学校に入りいじめについて考えることが多くなりました。私の中学校には「いじめあかん文化」があります。いじめをなくそうと全校で頑張っています。人権について考える「ぴ〜ふる」という部活があつて私はその部活に入つて今年は全校集会でいじめをなくすためのアピールをしました。私がこの本を読んで一番心にのこつたフレーズは「今夜、死のうと思います。」です。このフレーズを見た時私は、「いじめは人を死に追い込むとてもこわいもの」だと思いました。私はいじめを受けたことがあります。その時のことは今も思い出したくない辛い事です。学校に行くのが嫌でたまらなかつたです。みんなの目がこわくて、無視されたり、陰口を言われたりしました。陰口は聞かないようにしようとしても聞こえてきてとても辛くなり

ます。「この陰口は自分の事じゃない。」と思いたくても思えなかつたのです。こういう体験が主人公と重なり、思いました。

主人公は、いじめを受けるようになってから人の目を気にするようになっていて私と同じだと思いました。私も主人公もいじめを受けてから、人の目を気にして前を向かず下をずっと見ていました。発表のとき先生に「前を向いて話しましょう。」と言われても前を向くことはできなかつたです。人の顔を忘れそうになるぐらい人の目を見て話すことができなくなりました。人の目を感じて自分らしいことができなくなり毎日がつまらなかつたこともありました。主人公の死にたいと思う気持ちがとても分かりました。

しかし私は、いじめの辛さが分かつていたのにいじめを見て見ぬふりをしてしまったことがあります。見て見ぬふりをするのもいじめだと分かりました。「いじめはダメ」と言いたくても次は自分の番と思つて言えなかつた自分に今とても腹立ちます。友達を助けることができなかつたと思うと涙が流れることもあります。今は、いじめ

を見たら「いじめはダメ」と言えるようになろうと思いましたが、

主人公はラジオの番組の言葉や歌を聞いていじめに立ち向かおうと思えました。私は母に相談して「大丈夫、自分らしくいたら」と言ってもらい「自分らしくいれば良いんだ」と思うことができました。主人公は、ラジオを聞くこと、私は母に相談したことでいじめを乗り越えることができました。なんでもいい一つのことでも自信が持てたらいじめに打ち勝てるのではないかと思います。

この本を読んで気づいたことがあります。いじめがあったことで幸せになる人は一人もいないことです。いじめられた人もいじめを見ていた人もいじめた人も最終はみんな傷つくということです。いじめがあることでいいことなんて一つもありません。

私は学校でいじめについて考えて自分の意見をもって周りの人たちと対話しています。私はたくさんの人たちと対話することでいじめはなくなると思っています。いろんな人のことを知って、自分のことも知ってもらおうといじめはなくなるのではないかと思います。今私ができる

ことは、少しでも多くの人にいじめがどれだけ、してはいけないものか伝えることと、いろんな人のことを知ることです。

これから私は、自分の意見をたくさんの人に知ってもらうために、近くにいる人だけでなく、人前に立ち堂々と自分の意見を言える人になりたいです。

「きつときみに届くと信じて」

作 吉富 多美
金の星社